

磐梯山噴火の未発表写真の発見等について

平成16年 2月25日（水）

災害教訓の継承に関する専門調査会 「1888年磐梯山噴火分科会」

本分科会では、明治21年（1888年）7月26日付けの東京朝日新聞に「被災地を撮影した写真を、東園（ひがしどの）侍従が天皇陛下と皇后陛下へ献上しご説明申し上げた」という記事があることに着目し、この写真に関する調査を鎌田浩毅委員（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、火山学）が行うこととした。

鎌田委員は、平成15年12月15日に宮内庁書陵部図書課の協力を得て、磐梯山が大噴火を起こした明治21年（1888年）7月15日以降に集められた書陵部所蔵の写真を閲覧した。この結果、火山学の見地から磐梯山噴火に関係したと判断される写真21点を発見した。これらは、いずれも昭和12年に侍従職から当時の図書寮に移管されたものである。

明治21年の磐梯山の噴火では、山体の崩壊とともに大量の岩なだれ（専門用語では「岩屑[がんせつ]なだれ」）が起こり、460名を越す犠牲者が出た。この噴火にともない強力な爆風が発生し、堆積物をほとんど残さない地域にも大きな被害をもたらした。今回発見した写真には、これらの爆風によって破壊された家屋や樹木が多数撮影されており、噴火の規模や被災範囲の確定など、磐梯山をはじめとして今後の火山防災にとって貴重な資料となる。

鎌田委員がこれらの写真を磐梯山噴火に関連したものと判断した根拠は、1980年5月18日に発生した米国セントヘレンズ火山の岩屑なだれに伴う爆風（専門用語では「ブラスト」）が引き起こした現象、及び1991年6月～9月の雲仙普賢岳の火砕流にともなう爆風（専門用語では「火砕サージ」）が引き起こした現象と、いずれも酷似していたからである。今回の未発表写真発見の鍵は、火山専門家が直接写真を閲覧することを許可していただいたことにある。なお、明治21年（1888年）7月26日付けの東京朝日新聞に記述された写真は、書陵部所蔵の写真帳に収められたものであると考えられる。

その後、平成16年1月16日開催の分科会において、今回発見された写真の検討を行った。その際には、昨年国立科学博物館で発見された磐梯山噴火関連の写真、及び吉川弘文館発行の書籍『明治の日本』（2000年）に収録された写真9枚との照合も行った。

その結果、『明治の日本』において明治35年（1902年）の暴風雨写真として解釈されていた写真4点は、いずれも明治21年（1888年）の磐梯山の山体崩壊の際に発生する爆風によって破壊された写真であること、また『明治の日本』で磐梯山噴火関係の写真として収録されている5点は、今回発見した21点に含まれることが判明した。

『明治の日本』で暴風雨との解釈をしていた、あるいは噴火関連の写真を見落としていた理由は、火山学の専門家が直接写真を見なかったためと考えられる。今後、自然災害状況を示す写真等の調査には、専門家が直接写真を閲覧することにより貴重な記録が発見される可能性がある。このような調査は、災害の事実を継承し教訓を後世に残すという本専門調査会の趣旨に沿った重要な試みと考えられる。

今回発見された写真の詳細については、平成16年度末に「1888年磐梯山噴火報告書」（災害教訓の継承に関する専門調査会）で発表予定である。

最後に、この度の発見は宮内庁の理解と協力により実現したものであり、この場を借りて厚くお礼を申し上げる。